

4. 大西山がくずれた

大鹿村大河原中学校三年 M . M

(9)

あの時、いま思いだしてもゾツとするほどだ。あれはちよつど二十九日の朝九時十分ごろだったと思う。空は何さ意味するのか知らないが、一面におおつていた雲がひらき、青い光がふりそそいだ。

本道通りの人たちは避難してたのにもかかわらず、朝の仕事をしに家へ帰つていった。ぞのとき、ゆう然とどびえ立っていった大西山が突然すごい爆音とともにくずれてきた。大地が動いたやうな音だった。土が木がおおいかぶさつてくるやうな気がした。もう止まるかと思つた。山におされた泥があれ狂う海の浪のやうないまおいでぶつかつてはかえつていった。悪魔のしわざとしかいえないやうなありさまだった。一瞬にして平和な村が恐怖の村になつてしまった。Aのおぼさんたちは清水の方へ登りながら、皆は死ん

でしまつたといつて涙を流してゐた。

下の方は地獄としかいえないようであつた。赤いフトンが先に立ち、泥の海の中をつぎからつぎへといろんな物が流れてきた。私たちが見ている前で泥の中から人が出た。死人かと思つた。その人は山のくすれた方へ向つて、小さな子どもが歩くような歩き方をしまつて進んでいった。こちら側からその人を呼ぶ声が聞こえた。その声が聞こえたかどうかわからないが、こちら側へむかつて歩いてきた。Kのおばさんたちはむこう側の落ちた山へ登つていった。みんなは、一足がゆるいのによくまあ、とこいつつてあずきのように見える人たちを見つめた。どの人もどの人も青い顔をして

「こんなことがこの世の中にあつたいいことなのや。」「な」と話してゐた。いま思うとただ悪夢としかいえない。